

魚

おろ

アヒ

シメ



〇五

目次

もくじ

〔巻頭骨〕

朱位 昌併……………03
祝狩のそこ。

〔寄稿〕

広瀬 大志……………07
はじまりはじまり

古崎 未央……………19
流星群

齋藤 倫……………08
動物A

小笠原 鳥類……………23
群れているシマウマ、動物園の動物動物園の動物

海埜 今日子……………18
いしけりあそびをつんでいた

山田 亮太 カニエナハ 橋上……………30
THIS IS APEN!

河野 聡子……………36
指がシュークリームになっている

〔連載〕

小田原 のどか……………42
むりえわ

〔公募〕

カゲヤマ 氣象台……………49
「まわるイナカ医者マシーン」

〔骨おりダンスっ〕

カニエナハ……………54
曼荼羅ワンダーランド

吉田 恭大……………67
[NZN] \ [NIS]

兼柳 綾……………58
妻帯

鈴木 一平……………69
Pantograph Days

疋田 龍乃介……………59
ねじれり

金子 鉄夫……………70
アタルト通信

金山 大地……………61
(続・二) 失題、即ち闘争マシーン漂流記

〔ホネカイブつ〕

鈴木 一平……………71
(二) 「ブルックリン」 詩人の肖像―宋敏鎬

〔編集後記〕……………73

① 目次をクリックすると作品へジャンプします
② 目次ページに戻る場合は、
各ページの左下(ページ数)をクリックしてください

巻
頭



か
ん
と
う
こ
つ

今号よりはじまった巻頭詩企画。
毎号、寄稿者と骨おりダンサーズっからひとり作家が
『骨』をテーマに制作します。

朱位 昌併

祝狩のそこ。

祝狩のそこ。

朱位 昌併

崇め讃える部分の全体を殺して呼吸する
空白の間合い
から

棄てられた外を呼び込み
縛られて

はじめ（から
形式の線上の不満をのける
と

ひ ふ み よ

い う い う

これがわたしの神様です

水不足に

はねまある

かれは確率を抱いていまし（たば）かりみて

ほら

12トン気狂いなもの

それから詩人だし

咲き終える前

食まれたたくて啼かれたたくて

擬音の唄をあげたて

（に）どるの片親と

掘る手なの？

握るかも

いえ、なくて

畦につまづき緒が切れら

姉様すげえてお呉れんの

糸瓜でつながる土地の雨期

左曲がりの指の針

仮定法も順序の逆も

さぐる凍みかす

抓まれろ

とも

まだ

転回するはず

みつめ（た）ました

煮つぶれて

かかたがないのは

端と端の祝砲を正弦の縁にかたどる約束をする前から三呼吸の季節を通り過ぎる電線と見

知って搦め捕られたからではなくて

まわれまわれな厚みをすっては衣を捲くり

祖まで延びては蓋の脚にもあたってけ

彼には穴をかくしてペンライトの廃材を投げ入れる遊びがあった

入れるたびに囁かれるのだから

起こりうるに手を合わせ

まあるく

くちびるの裏にひつつく面倒を出す

上げてあげるは易けれど

針もなければ 糸もない

示すだけでも

「骨の白さをなぞっていけば何処に行きつくって？」

ないのだ

中黒も腹なしなのだ

こどものは(なし)

びんざさらをうごかすために

針は笠屋の腐針

糸は八百屋の腐糸

線から抜け出すひとつの首根

けれどもこれも已然形

地面を浮かせたいのなら掘り続けるしかありません

ただ

誤解こそ理解の愉悦とほころびましょう

名ごこりに

姉様 雪駄の先ごと落ちた

すげずに掘り挽き墨をとぎ

臍の緒つぼで受け止めて

腕から棄てても

数字を抱きたく所在なく

ふたひとへの誘惑

自転して呑みこむ糸と針

そこから散り咲く

この、とを

彼は公転していく円形の式に咲かせたいのだ

それから

空白は見下ろされる安堵に燃やされて
粹を吐けない種子となり
また
酸素にかえる

羽化はしない

はじまりはじまり

広瀬 大志

外科の見立てに似た

汎用性のあるファックで

郊外に道が続いていたり

建物が組み立てられたり

鳥が囀る

「コロラドに行つたことある？」

「おしっこしてくる」

「きつと行くはずだよ」

おまえの体を

楽器のように鳴らすために

指と舌は太陽の存在する以前から

人類に育まれてきたのだから

夏のはじまりは

それはそれは生々しい

恋愛でいいだろう

風の這う音が

昼から二度目のペニスの硬さに

ふさわしい緑だ

全裸には決してさせない

護符の袋に入れたままで

幸福を感じることに

匂い立つ歯型のついた太陽の

青さ

どこまでも

二人だけの部屋で

おれはおまえに合う鍵を下げている

動物 A^{エース}

斉藤 倫

47人いた 死亡広告も出た そのクラス全員がいまや本だった その生徒だったものなら
かたが47冊の本だった 夢は裁断される 眠りは製本される 別に信じられない卒業文集だ

そして美しさが話しだした そんな日がきたのだ
(また聞こえてくるDeath Mass調)

『動物 A^{エース}』

具体をめぐって降りてきたけど
そこにはなにもなかった

墮天使たちの子孫がぼくたち

一敗地にまみれたからといって

それがなんだというのか

具体的になにかを求めて

いたのに地にはなにもなかった

天と地ほどちがうっていうけど

天と地ほど似てるものってない

ガブリエル

ミカエル

なんでだかわかる？

そこにはぼくたちしかいなかったからさ

天と地は合わせ鏡だなんて

そこから逃れる方法はいくらだってあるのに

魚をくわえた子猫さん

葉巻をくわえたギャングたち

楊枝をくわえたおさむらい

食パンくわえた女子高生

そのぜんぶを

はるか上方で

くわえてるものなーんだ？

足りないものなーんだ？

じぶんの目玉の裏をどうしても

見ることができないように

ケータイの裏を

写メすることができない

ミカエルはいつた

足りないものは

翼じゃないんだってことを

いつか知るだろうか

なーんだ　　っていうだろうか

「オレ　オレ」

とノストラダムスはいつた

『オレオレノストラダムス』

自我と他我のあいだに

余我があって

どうぶつのポーズをしている

眠れないなんていつてるけど

ほんとはどうかしらない

絶対ねちやいけないっておもうと

ぎゃくに眠れるんだっていうけど

それってほとんど

禅といっしょだ

笑い泣きも

苦痛の涙も　こぼれ落ちる

涙から見たらかわらないよね

ぼくがもし涙だとしたら

二千年かけてまだ落ちてる

まぶたから地上まで

いまもたどりついていないんだ

『昔の日本人』

昔の人の死生観には

丹田があつた
とおもつたらまず
それを取り出して
ペトリ皿におくべきです
丹田といえども
ただのマスコット
虹を上空からへりで見ると
球体になっているとおもつたら
そのロマンティックを取り出して
ペトリ皿におくべきです

計画殺人より過失致死のほうが
罪が重い国はないだろうか ね、ガブリエル？
『動物A』

『レギオン』

小さくて
かわいくて
蜘蛛の仔のように無限に分かれる
あたし レギオン

遙けき海原に抜き立つ
特有の記憶をもつ樹木
の木陰
にそれは

浮いている 『人造人間@P』
アトピー

『アリスの国のアリス』

この校舎に二度と
日は暮れなかった
九十六時限目がはじまった
その一日はついに終わらなかつた
焼却炉から上がっている黒煙
あれはなにを燃やしてるんだろう
放課後が来ないのに

ゴミは誰も出さないのに
次の日直は登り棒とバスケットゴール
委員会が吊るされるのだ
それも朝がくればの話

文学上の謎はたったひとつしかない

「虐待されたのは誰か？」 『葦野弦人のあいさつ』

九十六時限目のベルは
掃除ロッカーの中からドンドンと叩く音
戸を開けて
入ってきた先生は私で
振り向いた生徒も
みんな私だった

『人造人間@P』

砂場にトラックを押し押し
野良犬を威嚇していた少年が
わたしを押し並べて毒づいた
「おまえの臭い脳髓が
だれのコピーだったのか
そのそもそも調べてもこれぬのなら
秦帝の埴輪もろとも
坑にされるがいい！」

おもえばあれが
旅のはじまり

「わかるだろう？論理と直感の？

対決では？もう手遅れなんだって？

それが悪魔が？用意した？罠なんだ？

ん？」

ジーザスはいった 『語尾上げクライスト』

「幽体離脱してるひとの横でラジオ体操してたらさ」
「うん？」

「大きく息を吸ってーのところで」

「吸っちゃったんだ？」

「いがらっぽくて」

「やっぱなんか変わる？」

「ちよつと太った」

「吸ってるね」

「吸ってるわ」 『昔の日本人』

“ ささやかな幸せかオマエは！ ”

“ 夜勤明けに牛井屋でつける生ビールの小グラスか！ ”

“ タクシーがカーブを切るたびに頭のうしろで

リズミカルに左右にすべるティッシュの箱か！ ”

“ すべてのクレタ人は嘘つきだ ” とクレタ人はいった

っていうのがパラドックスになっちゃうのは

地の文を誰がいつてるかわからないからだ

ってことに早く気づけ！ ” 『つけめんのおおきみ』

空漠なんて

景色はない

お願いまだ

帰らないで 『レコンキスタガール』

『犬トウギヤザー』

犬が無数にあつまって

人間になつたのだ

犬は無数に

あつまるべきではなかった

だからといって

なにかがよくなつた

わけではなく

まるめられ あつたかく

されたのだ

犬トウギヤザー

この視界はおかしいよ

この視界は

ぼくのじゃない

この白樺を見ているのも
この幕間に立っているのも

無数の

無数の

泣いている犬だ

「オレオレ オレです」

「どちらさまでしょうか？」

「ノストラダムスです」

「ああ クラスの？ ちょっと待ってね あの子いま二階でゲームして
るみたい」 『オレオレノストラダムス』

「比喻から逃げると描写になるでしょ 描写をつみかさねるとまた比喻
になつてゐるんだつて 逃げられないのよ 比喻バベルよ きーきー」
と葦野弦人はいった オカマは見識がある 見識とはオカマであると
いつてもいいくらいだ 「どんなに面白い詩だつてすべてが大地や町
の比喻になつてゐるようじゃ浮かばれないのよ 浮かばれないつてなに
が？」そこに彼は来た 大天使ミカエルである 「犬を撫でてゐると
き 犬はだれに撫でられてゐるか気にしてゐるだろうか その「撫で」
の延長に人格のあることを想定してゐるだろうか」いまやただの犬バ
カとなつた墮天使はいつた 『葦野弦人のあいさつ』

ヒグマが

ツキノワグマになる

キツネが

キタキツネになる

人間のブラキストン線は何処にあるのか 『動物A』

(生まれるまえから死んでるなんて)

(かわいくつてしょうがない) 『火葬場生まれ』

『スース』

犬の名前はスース。老犬で

拾われたときにはもう

歯がほとんど溶けていた

口臭のひどい哲学者のようだった
毎日ひとつかみの毛が抜け
ミルクばかり飲み
いやなおいの便をした

闇の中で目の前を横切った

小さな動物が私じしんだったので

私はアクセルを踏みこんだ 『動物A』

スースは知っていた。東京では
水商売の女がアパートの三階に
ドーベルマンを飼っていて犬は
散歩のたびに階段で爪をすり減らすのだ

愛はいつも身をよじらせて犬小屋をくぐるようなもの
それを囁くときに大事なことは犬小屋の内にも外にもないし
犬小屋さえもさして重要ではない

ともあれオレは不死だ 『つけめんのおおきみ』

わが甲状腺は

5^キ 渋滞 『人造人間@P』

『語尾上げクライスト』

つていうかジーザスクライスト？つてふつういう？
オレはね救世主？メシア？つていうけど
どうしてそんなこというの
せつかくよみがえりの時が来たのに
語尾を上げるの？復活のときは来り？つてなんで

あなたを愛しすぎて煉瓦になる 『レコンキスタガール』

語尾上げなの？だから誰一人信じない
隣人を？愛せよ？この世界では
質問に質問で返すひとなんて
誰も信じないのよクライスト？

『喩が喩なら』

夢から剥がれて
目が覚めた
小魚のような朝
喩が喩なら
私は憲兵
あなたは姫
遠ざかる大鼠城
湯剥ぎされる僧兵
こそあどことばを解いて

そんなこといったらカニはいつだってダブルピースしてるぜ？
生きたまま茹で殺されるときだって
『Clabismの起源』

喩が喩なら
私はライトセイバー
あなたは光熱費
インカ帝国の末裔と
亡ぼしたのはたかが
ひとつの喩
世代にまたがって
及ぼしたのは
にんじんの葉
スリルがあるだの
ないだの
喩が喩なら
泣いて
いきがって
天竺を携帯灰皿に
いれて
予備タンクにか
くした
伏姫の珠も
喩が喩なら
いろとりどりの
ワタゴミなのだ

場所なんて概念に価値はない
犬が肉球で感じる
ところいいがい

この世に場所はないのだから 『動物A』

オレはさつきから

いつたい誰にピースしてるんだ? 『人造人間@P』

ガレージは泣いた なんでみんなオレの中でそんな酷いことをするんだ
あの悲鳴もあの悲鳴もあの悲鳴も 気づいているのか 悲鳴にはぜんぶ
名前があるんだよ 酷いから 本当に酷いから オレは早く死んで 一
刻も早くこの世から消えて 二度とガレージなんかには生まれたくない

『レギオン』

『ポルトレ／ポエチカ』

『ポエチカ』という名の

もう一冊の本がどこかにある

大きいか小さいかはわからない

バスの最後尾にあのとき

見知らぬ男が座っていた

どうしてまぎれこんだのか

たったひとりだけクラスとは

無関係の者がいて

だれもが気づいていたのに

だれも気をつけなかった

その男が

もう一冊の本だったのかもしれない

圧縮して

圧縮して

心だけになりたいのって

指輪のかわりに埴輪をはめて

バカだろう?

ぼくがもし涙だとしたら

二千年かけてまだ落ちてる

まぶたから地上まで

いまもたどりついていないんだ 『動物A』

トラウマがほしい

トラウマがあつたら

この雪景色もちがって見えるかなって

バカだろう？

かわいくって

かわいくって

中央線に捨てたくなるよ 『火葬場生まれ』

かわいそうなレオポルド・ブルームの

死んだ子どものルーディの亡霊の

チョッキの胸ポケットから顔を出す

ちいさな白い子羊を護るため

ぼくは生まれた

世界は存在する 『葦野弦人のあいさつ』

47人いた

そして美しさが話しました そんな日がきたのだ

(また聞こえてくる Death Mass 調)

そう

ついにぼくは弱くなった ようやくただの

どうぶつ A になれたんだ 『動物 A』

みしらぬカワがいそしんでいた。すくなからぬスイオンで、むこうというよりもみぎがわで、ゆくてをはばむ、あれはだれのゆびわだったのだろう。なれたとたんにばらばらになり、やってくるよ、ひとつつんでは、こえがいたんで、いしをける。

ひらけたカワで姿がどうしてものまれそうになるから、あとでなまえをつけてやる。みぎわでしたよ、わたしのスイシツが、どうしてきこえないのだろう？　ここは以前、さけびでした。かれるぐらいにハナにむせて、いしをつかんでたずねるのです。

くすりゆびとまちがえて、みぎでなのに、まぎぐるタイオンがゆるいのです。さめぎめと、なりひびく、スイオンまじりに、めずらしくかろやかに、そうしないと、どんどんほとりで、ふもとにねむってしまふから。カワのひきつれ、いしがむすぶよ。

波紋がぬぎとられ、かわいてしまふ、スイシツから無口になれば、みぎのわなからのがれられたか。いまならばハナをかいでは、くぐらすのだ、こえをかぎりにいしにきく。やってきても、どうしたっていいないので、はなさず、きつとカワをさいて。

ちいさなゆびわのやきついていた。あれはだれの、ふたつつんでも、ハナをつかんだら、うかぶからね。みぎになげすて、かえろうとか、かえろときこえる。ひろがるシツオンがばんそうです。もう、みつめたりなんか。ふとももだったら、さあ、またげ。

てごろないしを、いつか、みかけたかったのだ。ゆびわをぬぎとり、よすがをぬぐって、みぎのカワをどうしたって、おおわなければ、そう、だれをいいきかせていたのだろう。かくもみじかき、ときをぬるむ。ひとつのハナがいしをさく。

もうすぐだから、きこえてごらん。カワがはがれ、スイオンだったら、いっしょにわかれていったのだと。こえをぬらして、かきあつめてよ、けられたいしを回向です。ひとつつまんでは、ハナをおさえ、かわいい子らににぎるのだ。

カワをまとつて、ゆくてをてらす、つんぎくほどにいしがうもれ、ゆびわのかずだけ、くらがりですから。ひとはだよりもスイオンをつむぎ、ハナばたけ、けちらすまえにしせんをたわめる。くすりゆびなら、ひとつおこつては、なつつこい。あ、はずれた。

またくずしにやってくるなら、ひとつのこらず、ささげておしまい。あたりはますますみぎをひらいた。ゆびわもきつと、わたすから、ひとつつんでは、ばらばらになり、カワをなげ、ハナをいたむ。なまえをゆつくりスイオンです。なりひびいて、いしをさきたい。

流星群

古崎 未央

1、この町の季節は永遠に夏の終りだという

町境の鉄橋から鋭い風が砂を巻き上げて吹き付ける

人気のないまちなみのどこかから金属の高い音が響いて

早く彼を捜し出さなければならぬと鼓動が早くなる

風の通る方向に沿って

廃墟と瓦礫の山を越えてしばらくいくと

急に視界が開く砂礫の広場に出た

白い風紋の中心に彼が素足で立っていて、途端

よく知っている骨張った手が伸びてわたしの心臓を握りしめたようだった

呼びかける言葉ではなく声が出なくて

遂に遠ざかったまま真昼の流星群に飲まれて

目を開いたときには彼の姿はなかった

風紋の中に足跡を残して

やがて足跡は風に流されて

跡形もなくなった頃にわたしは崩れ落ち

ようやく漏れ出したのは嗚咽

今日が終わったら

次の日の中で再び彼がいなくなる

わたしたちは喪失を何度も繰り返して

傷つきながら傷を癒す術を学ぼうとする

空虚を水のように空気のように飲み込んで

お腹が膨れていく

皮膚を覆う膜は少しずつ厚くなって

明日の喪失に備える

(あの日、あの夜にもう一度戻れたら、)

(

声に出さないで

口元にかざした約束に息を吹きかけて

小さな灯火が薄く伸ばされて消えた

2、魔女が一人で濡れる夜

今日もこどもを産まなかった

多分あしたもそのつぎも
わたしはこどもを産まない

息継ぎをして

あぶくよりも重く上昇するからだ
だが溶けない限りは生きているからだ
を恨めしくおもって
また空中に放たれたからだは
すぐに落ちてしまう

悲しい悲しいと言って人はきつと
その悲しみを軽視する

だから悲しいときに決して悲しいとは口にし
ないで
みんな回り道をして悲しみを訴えるから

しばしば手遅れになって癒すことが間に合
わないで人は痛みの中に崩れてしまう
どんな痛みを見せたら君はわたしを見て
くれるの

どんな健康の中でわたしが一人病んでい
けば
君はわたしの額に手を当ててくれる

わらって
でもわらわないで

きいて
きずをひらいて

じつとみつめてほしい
めくばせをして

海にそつと投げ入れた瓶
の中は

まっさらな便箋
わたしの書けなかつた言葉が

海を渡って
渡りきらないで

海の底に沈んで
割れて

溶けて塵になる
人魚が言えなかつた言葉と

人魚が溶けた海と
なんの関係もないのに

得意な気持ちに
なるなよ

！

3、迷宮砦

余白の中で紙魚が行き場を失った先に明朝
体で小さな読点からだを捕らえた
なだらかな構図に光が射して迷子たちは
皆おなじように目を細める

歓喜に満ちた路地、悲哀に溢れた街路樹、
生もなく名もなく歩き回る透明な精の虫を
目の潰れたこどもたちが歓声をあげて捕まえようとしている
わたしたちの王国です！（王国です）
未来の恋人、ミネソタ！（ミネソタ）
ひとしきりの雨のち脆弱な曇天が脳髓模様で垂れ込めている
泡沫に消えた流行迷路の支配人たちが
首をくくり飛び降りしている間に大きくなった息子らが
ひとりぼっちで彷徨っている
しわくちやになつたスタンプ帳を握りしめて
本を閉じなさい、それから
目を開きなさい、あなたは
とうに出口を知っている

4、もうすぐみんないなくなってしまうような気がする

わたしたちはしなやかで丈夫な鱗のからだを
反り返り折り曲げては水面を叩くように何度も跳ね上がった
底ではいたるところで水が湧きあがっているため
泳ぐことをやめても沈み込んでしまうことはない
泡にまみれて常からだは浮びあがり
映りこんだ大きな月の影を愛撫する

ところで先日こんな手紙を読んだ

「5011年12月30日の君へ

君は今どうしていますか。
相変わらず青臭いことを叫び、声を囁らしていますか。
まったく違う場所で別の生を始め、また終えていますか。
それとも、やはりどこにもいないで、消え去ってしまったままですか。
わたしは今、どこにいるのか、何者だったのか、思いだせずにいます。
君が気流に乗ってこの世を去り、灰と骨を残したすぐ後に
地上にはたたくさんの小さな流れ星が降り注ぎました。
あれはまるでほしぼしの嵐でした。
わたしたちは目を丸くして、口を大きくあけて、
小さな星のかけらを飲み込んで、
四方八方へからは飛び散ってしまいました。
そうして細かい粒子となって光りかがやきながら、
大気とまざりあい、上層へ浮び上がった頃、
わたしはわたしたちとなつて再び地上へ降り注ぎ

地上はわたしたちの塊になつて
陸へ落ちたものはけむくじやらに
海へ落ちたものは鱗をまとつて

ひたすら走り泳ぎ流れ続けるひとつのわたしたちとなりました。
だからわたしは君にとつて

家族だったのか、友人だったのか、恋人だったのか、
はたまた知りもしない誰かだったのか、今となつては分かりません。

ただ、今こうして手紙を書いているわたしは
君がわたしのことを忘れてしまふくらいに

別の星で違う生を始め、終え、また始めて、
何度も何度も産まれては死ぬことを繰り返していたらいいなと思います。

わたしたちはもはや死ぬことも産まれることもありません。
ただひとつの広く浅い意識です。

もうずっと終わることなく続く時間の流れです。
だから、君がいなくなつてしまったことが、

今となつては幸いであつたと思うようになりました。
おかしな話です。

最後になるけれど、ひとつだけ。

3025歳、おめでとう。
もう二度と会えない君へ、

名前のないわたしたちより。」

手紙は誰かが底で拾い上げて、そうして一斉にわたしたちに伝わった
どこかで懐かしい気がすると言つて涙を流す声でした

涙は水を少し塩からくして

わたしたちは恥ずかしくつて水を攪拌して、波が産まれた
底の方から湧き出た水が
震えながら空へ向かつて弾けた

もうすぐ、あたらしい生命が産まれる
予感がする

群れているシマウマ、動物園の動物動物園の動物

小笠原 鳥類

カナヘビ（金蛇、トカゲの細い一種）だ、が、あの、動物園の、細い道を歩きたい土だと思っていた。あの道の横と……横にはキラキラの草が並んでいる。ピアノであるし、上からピアノの音があるのは動物園の白い木の建物（白い。木を、並べた、横に、並べた、窓もある建物）でピアノを弾いているような謎の放送であるのか、本当にそこにピアノがあつて幽霊が演奏しているのかということを考える。本当にそこにピアノがあつて、長いホヤのような水中の水色の生き物が透明透明であつた。カナヘビは謎を知りたいと思つている動物園なので、この細い道は人間が歩く道で、細い金属の向こうにパンダのような動物園がいくつか並んでいる丸いのを見ていた。私は道路をススススーッと音がない、走るカナヘビの速さを見ていたがあつた後ろ。カナヘビの後ろオーケストラ

そこで書店で、今年（二〇一一年）四月の本である、さとうあきら『動物園の動物』（山と溪谷社の、新ヤマケイポケットガイドの一冊で、カラー写真がとても多い図鑑で文庫本の大きさで、カヴァーにパンダが笑つているように木が後ろにあつた。木はキノコの舞台）ああ、動物動物である題名のピアノである、この……本は、二〇〇〇年に同じような本が、あつて、「改訂、新装したものです。」（二八二ページ。は、奥付のページである）部屋の奥で、ヤモリやカナヘビは新しい表紙が光つているピカピカだよ、と思つていた。今回はこの二〇一一年の本からの引用をゴシツク体にするのですよ。この本に出てこない動物の名前もたくさん書きますよ予告。二〇〇〇年の頃にそういう文庫のガイドの本が書店に並んでピカピカで、星の本青い星座の本も、そこに、ピアノ並んでいたカナヘビであるトカゲの一種だ、そこに背中があるウミウシ、と言つていた。コンクリートの上のウミウシと、それから、コンクリートの上でペタペタという音がない走っていくヤモリの速、度。

この本の、さとうあきら さん、が、奥付のページの（辞書の奥付のページであるならこれはピアノについての曲を集めた楽譜も多い引用されている事典事典であつたのではないかと）著者を、紹介、する、文章で——「**写真学校在学中に全国の動物園に飼育されていたゴリラをすべてカメラに収めたの**」であつたというので

(この人の名前を漢字で書くと「佐藤 彰」)であるのだそう)、トカゲが入っている機械の中でトカゲもグルグル回転している小さな動物で、この機械はトカゲが入っている冷たいこともありますよ、しかし。太陽の、光の、下で、暖かいトカゲであることもあったトカゲの背中が夕方のテレビのように温かくて、明るかった。トカゲがゴリラを見たんだ撮影する。トカゲが見たものが青い冷たい写真だ。夕方のテレビには川が、撮影、されていて、私は川の上の橋の上でベートーヴェンを歌いながら(交響曲第六番だった)走っている人を見ていたことがあったかもしれないが、歌っていたではなくて、後ろのオーケストラの人たちはバスに乗って、それから、それから演奏していたのではなかっただろうかと思う風景を見ながら。風景は印刷されていたのだ、四角い紙にトカゲが。

しかし(シマウマ集まってくる)私は、ここで、最初に、シマウマの話をしたかったということをも木の並んでいる舞台の上でアコーディオン持つて。アコーディオンを持つと重いし、古書のようなカビのあるアコーディオンを開いたり……閉じたり……しているのであると、カモシカ、という語を思うがシマウマ。かなへび。シマウマについて『動物園の動物動物園の動物』の半分の題名である本では、「特徴である縞の意味にはいろいろ説があるが、仲間を集める効果があること以外、詳しくはわかっていない。」(一三九ページ)しまは、しまへび。最近鳥の図鑑であると思って書店で見たら鳥の図鑑である青い文字であることがあつて写真が多くて、なぜシマへびを食べた話のような話をいつまでも私が夕方に読んだのだと憶えているのか、ピアノの練習であつたのであればピアノの曲をいつまでも忘れないピアノの人の手の上にトカゲが上にいるな。トカゲの上にピアノの音があるなら、ピアノの上にもトカゲがいてなかなか大きいイグアナであることも、ありました。動物は仲間なので、いろいろ集まってくる縞。毒があるのかどうか知らないがスカーレットキングヘビという蛇に、縞。レコードのようだった。ビートルズのような縞だったのであるギター。それで、それ、で、なぜなら、そのような縞があるのはなぜなのかわかっていないから、ということをもシマウマについて辞書のような本で言われていた放送されていたのであるなら果物を私は食べないのだが、さっきの引用と同じページページに、しまうまが「**数頭集まると、何頭いるのかわかりにくい。それも縞模様の理由?**」と、書いてあつたので、しまうまがウミウシになって草原の虎にもなつて、私はいくつかの詩を文章を集めて(集めるように書いて)、どの詩がどの詩であるのかわからぬいどの文章が……どの文章であるのか……集まった仲間を集めている詩や文章を一つ

の場所でグチャッと（おお、）書きたいと思ったのである。魚が多いと思ったでしょう？魚が多いとクジラに、なるんだな。ここで

「十三羽だと思うが、この色彩の洪水のなかにもう一羽くらい隠れているのではないか。」というのは別の画家（これまで画家の話をしてなかったけど）についての本からの引用で、狩野博幸『目をみはる伊藤若冲の『動植綵絵』』（小学館、二〇〇〇）で、狩野さんが、若冲の「群鶏図（ぐんけいず）」について、言っていたことなのである。シマウマの絵だったというトカゲの考えだった。なぜなら少しシマウマのような模様もウミウシたち（ニワトリたち、と言いたかった）の中にいろいろ見ること見出すことが可能である、できる、からなのである。トカゲは、できる。

目をみはる……伊藤若冲の……しかし。ところで、私は『動物園の動物動物園の動物』の半分の題名であるような本について今日は書きたいと思ってきた。今はここにいる動物園ではないけれどバナナがあるような場所でもない。

おお『動物園の動物』（オペラのように歌う）引用「アカカンガルーの雄同士のボクシング。」（写真についての説明、十五ページ）。私は十九世紀のシャーロック・ホームズ（エルヴィス・プレスリーではない）の版面のような版面で、人とカンガルーのボクシング（ゴヤの牛の絵を見たのよ、）の細かい暗い線の四角い絵を見たことがあったと思うし、カンガルーが何匹いるのかも集まっていたわからないことがある。シャーロック・ホームズが何人いるかわからないし、ワトソン、それからクリック（という、人）の、笑っている模型の前の笑う人たちの写真を見たことがあったDNAの模型だったのである。ついにDNAの形がわかったぞ（一九五三年叫び）。プラスチックで作ったんだらうなあ星座の図鑑を。

『動物園の動物』……コアラは「おとなしいイメージが強いが、繁殖期には驚くほど大きな声で鳴く。」（十八ページ）あの人はおとなしいトカゲのようでしたよ、太陽の下で砂の上でゆつくり歩くんだけ。であつてもDNAを発見すると大きな声で鳴くのだし、あるいはハリネズミ、あるいはワオキツネザル（楽譜）。スローロリスは「非常にゆつくりと動く動物」「道化役者（オランダ語でロリス）」「有毒のヤスデなどを平気で食べてしまう。」（二六ページ）ヤスデを食べるとトカゲを思い出すレコードの回転だった。ヤスデはグルグルとゴカイのような動物であるのでグルグルのレコードでロックンロールなどを聞いていたブラームスも。レコードの上で道化の人はグルグル回って、鏡の上でも回っている（箱を開いた時）。木やプラスチック 箱の、蓋の、彫刻の、模様を、カードの、裏側か天井であると思つて、そういうデザイン

を集めた本を昨日は見ていた少し

猿の多くの種類、それから ありくい なまけもの、あるまじろ、ビーバー、やまあらし など。細い道は枝で、金色の枝の上をカナヘビがキラキラッと光って歩く氷の雪の春。

あートビウサギだ、『動物園の動物』六七ページに、いる。かわいい

フェネックは、八〇ページ、ですね。かわいい「耳の後ろがかゆい。」(引用だよ)

「タヌキとらび、最も原始的なイヌ科動物と考えられている」のはヤブイヌ(八三ページ)で、タヌキがピアノの上にいるのであれば、ヤブイヌはヴァイオリンの上にいるのだリスなのだよ、という話なのだと思った。数人の人が室内で音楽を演奏していると、木の舞台の上にいるいろいろな動物が並んでいて、人々を、見ている。それから布を見たりしていた、なぜこの室内にはカーテンが多いのだろうね、レントラントの時代には絵を布で隠すことが多かったという話、話だったのかなモーツァルトについて人々は話しているよヤブイヌは「後ろを向かずにバックで走ることができる。」このピアノの演奏は…サッカーですね、という小さな声の話を聞いていた。舞台があつて、椅子がある。頭がない動物が走ってくる妖怪なのかなと思つて見ていたら後ろに頭があるようで。落語、

いろいろなクマのページの後で、「**白と黒の体毛が独特な模様をつくる**」のが「**特徴**」(九二ページ)である、その動物の、名前…をなかなか書かずに、たくさんのその動物が集まっていると、シマウマが集まっている群れであるように虎の群れで、どのような生き物(ウミウシ)がどれくらい集まっている数匹であるのか、石を見るようによくわからなくなっていくパンダ。星に石がコロコロ集まっています白や灰色もあつてイグアナも背中の上において、それから、どれくらい多くのものがどれくらい何枚の絵であるのかもよくわからない模様がクネクネになってしまっている迷路だからである。シマウマも迷路を作った、パンダの白と黒の体毛が独特な模様を作る、ジャイアントパンダの、白と、黒の、体毛が、独特な、模様を、作る。独特な——模様を——作る。地球のどこに何が何匹いるのか全くわからない。線のような虫も群れている水中であつただろう。次のページで竹を食っているパンダパンダ。それから次のページにレッサーパンダ。レッサーパンダの次にアライグマ「**古い建物も隠れ家を利用する**」(九六ページ)あの古い城に竜がいるんですよ。竜の絵を集めた本を広げて見ていた地図。城を洗って石が光ったとき、その地図も湖で洗われてしまう、ボロボロになった地図をアライグマが爪で読んでしまう かわうそ。ツツツと爪

で陸の形ペンギンの形を読むんだね 新しく描く土地の名前もあるだろうさ。ここにはキリンがいますよということを書き。地図の上で人形が踊っていた。

ラッコは一〇三ページ。ラッコの歌があったね「**けわしい山岳地にすみ、夜行性のため、いまだに謎の多い大形ネコ。**」(一一七ページ)が、ユキヒヨウ。飛ぶだろう。夜は夢なんだ、夢は木の上で、その木は青い黒い闇に浮んでいて光っている。走っているキラキラの星。それから虎、ヒヨウ、ライオンが、映画。チーターを記録する映画。それは動物が走っていてサンダルが走っていて(サンダルが生き物であるなら)それからザラザラのカラー印刷の科学雑誌の表紙でネコ科の大きな動物が口を開いているのを夕方だなあと見て見て、数十年前の、印刷。あの印刷を今でも古書店で集めたいと思っっている暗い古書店。広告も、あった。広告で雑誌で、そこには例えばテニスをする人の写真もあって、テニスが夕方であるなら、テニスの会場でライオンや山猫が走ることも多いだろう赤い地面であるだろうザラザラのザラザラの地面の上でネズミを見たりアニメを見たりしていました。プールで泳ぐかもしれない鹿を見たことがあるのです窓から。

それから象がいて、シマウマについては前にグチャグチャなことを書いていたし、バクがいてサイがいてカバがいて、鹿がいてキリンがいた。ということを書いた。練習していたのである。花(ひまわり)の絵が楽譜の本の表紙に書いてあったのではないかと思える。それから緑色のフェルトの布があった。その上でワニが歩いていたのである。ワニは三・五メートルだった。「**謎が多い**」オカピ(一六二ページ)、「**詳しい生態がほとんど分かっていない野生ウシ。**」のアノア(一六九ページ)はトカゲではなくて、トカゲやワニが出てくる映画ではないなあ、あれはロックな映画でもあった。ゲームをするような緑色の布の上でボールもあったし、小さくなった科学の人や冒険の人や夢の人がSFの人であって、大きなワニを撮影の人が動かしていた。ほんとうのワニではなかった夢であつた本当の。「**ヌーの群れ**」(一七六ページ)群れの写真は、ないけれど。

その後、「**家畜・ペット**」のページが一八三ページから開始される映画。映画は宇宙から来たものでカチカチカカカと始まっていた。暗闇で映画を見るなあ、青い光は機械から出て来て布を見るように広がっていたよイグアナの皮膚のようだったんだ。ハムスターうさぎモルモットなどから開始されて:動物の記録の映画で口を大きく開く恐竜もいて、この恐竜は粘土で作って少し少し動かして動かして少しずつ撮影したものではないですよ「これは生きています!」とポスターに、英語で、書

いてあった。ひつじ やぎ ろば ラクダ。私は料理の名前も書きたくなかったよス
パゲッテイ

その後、その後、おお、「**日本のほ乳類**」のページが恐竜の映画のように二〇三ペー
ジから始まっているのであるし、たぬき がいました。たぬきは丸いですね。あー
この『動物園の動物』という本では、本では、哺乳類がここまで多く集められてい
る図鑑で、田園の交響曲を集めているようだったな、「**鳥類・は虫類**」のページは
二一三ページから始まって、その寸前にニホンカモシカがいたのです（二一二ペー
ジ）。私は窓からニホンカモシカを見たことがあった。その時に私は電車の中にいて、
東北地方の山の中を走っていて、ニホンカモシカが山から電車を見ていたことを憶
えている。タヌキだったかもしれないと思っていたのだ。道でニホンカモシカがい
るよということの人々が言っているのを見て、ああニホンカモシカが道にいるねえ、
と、道で思ったこともあったかもしれない。それは土の道だった私は歩いて走って
いたカナヘビ。

鳥類はダチョウがいて、「**ぼさぼさした感じに見える**」エミュー（二一六ページ）
がいて、おお、ボサボサした感じに見えた。しかしニホンカモシカもボサボサかボ
ソボソであると思った。山にいるニホンカモシカは動物園にいるのではないのでサッ
カーをしているのだと思った爪。ペンギンが数種類『動物園の動物』という本にいた。
「**フンボルト海流に洗われる地域**」（二二〇ページ）でフンボルト海流で洗われてい
るのがフンボルトペンギンで、海流はアライグマの長い手だった巨大になって液体
になったのである。日本でフンボルトペンギンが多く飼育されていますよニホンカ
モシカのようなものだった、シマウマの群れのようなものでドロドロ混乱して何匹
いるかわからない魚。魚を食べる。そして、フラミンゴが何匹いるかわからないから、
足の数を数えた。湖が緑色であるなーペリカンこんどるクジャクはじめて動物の図
鑑を見る人はひらがなの名前を多く見ることもあるだろうから表紙に『とり』と書
いてあって、それから『うなぎ』とか、『みみずく』とか、『しゃくやく』と。シャ
クヤクはボタン科の花だなあ。花の名前を初めて書いた海だ。

カミツキガメ、ワニガメ。かみつしがめが「**攻撃的**」で「**危険**」（二二二ページ）
なのでこの地球から逃げるだろう。宇宙船が緑色で銀色で青い字が書いてあった。
しかしカミツキガメは宇宙船の中に入って来てしまおうし、ペンギンは銀色の花が多
い部屋で平和に歩いていた。イリエワニは「**海流に乗って移動**」（二四〇ページ）す
るので、アライグマがワニの背中を流して洗っていることもあるだろう爪。それか

らアライグマはステーキを食ってしまう。イグアナ、コモドオオトカゲ。(かなへび)それから私はコンクリートの上でヤモリを見たことがある。ヤモリであることは指の形でわかったと思った。図鑑で確認した映画で確認したようである気分。動物の昔の記録のカラー映画はいつでも夕方で暖かかった。それから人はあまりいなくて画面で、それで、人の声でいろいろなことを説明していた。「私たちはこの大地からそろそろ逃げなければならぬだろう」それからライオンがやって来る。「**正確な記録では最高で八m三八cm。**」アミメニシキヘビ(二四五ページ)

それから、それからだよ、「**水族館の動物**」(この本では哺乳類と爬虫類であるのだなあ)の章が二四七ページから水族館の光を記録する映画かテレビのように始まるのが。イルカがいてシャチがいてシロイルカがいる。私は『少年アシベ』という森下裕美の、アザラシが登場してくる漫画を二〇〇六年の夏の頃に非常に幸福な気分読んでいたのだよ、ゴマフアザラシやいろいろな丸い動物がコロコロであった。今年(二〇一一年)四月は『少年アシベ ゴマちゃんセレクション』(双葉社)という選集の帯で、「ゴマちゃん、またあえたねっ!」といろいろな色の字で書いてあったので再び幸福になるカエルも。

ミナミゾウアザラシ カリフォルニアアシカ(『動物園の動物』の動物)。トド。せいうち、それから、私が風呂のような小さな水族館の水槽で青い壁で、暗い建物だなあと見て見たことがある背中のウミガメが浮んでくるのを見ていた。その風呂のような小さな水槽は青いタイルがあるようでテレビを見ているようでその風呂でイルカも浮んで喋っているのではないかと思っただし、他にもいろいろなワニや魚のような石のように暗い生き物が浮んでくる幸福なのではないかと思っただしある明るい。そのような水族館で私は生まれて育ったカワウソだったのかもしれないと思える笑い。石鹸が笑っている

Is This a pen?
No.

橘 上

カニエ・ナハ ×

山田 亮太 ×

This is a Pen!

Is This a pen?

NO.

私は言語実験という言葉に違和感を覚える。言語が実験的でなかったことはなかったからだ。

「This is a pen.」と言うこと以上に実験的なことはない。

「これ」とはなんだ？ 「ひとつ」とはなんだ？ 「ペン」とはなんだ？ 「である」とはなんだ？

必然的に全ての言葉には疑問符がつきまとう。

「This? is? a? pen?」というわけだ。

見えない疑問符をつけながら、さもわかったように言葉を発する。

これが実験的でないわけがない。

このように、実験的でない言語は存在しない。

私はロマン主義という言葉に違和感を覚える。

私がペンだと思うものを、あなたもペンだと思う。

全く違う人間の違う目に違うように映る「これ」を私もあなたもペンだと思う。

このことが既にロマンチックではないか。

人はロマンを抜きに言葉を発することなどできない。

例えばあなたが沼の水質調査の報告書を書いている時でさえ。

「This is a pen.」と言う時には常に危険がつきまとう。

「これ」が「ペン」だという保証はないし、「ここ」に本当に「ペン」があるのか、そもそも「これ」はあなたからみたら「それ」ではないのか、と疑い出したらキリがない。

しかし我々は「これがペンである」という意味が、響きが、ここにあるペンが、根拠なくあなたに伝わるということを信じて、疑問符を取り払い、あなたにこう言いきろう。

「This is a Pen!」

Tip!

山田亮太 × カニエ・ナハ × 橘上

一、
TiP！男性名詞。心の純粋な自動現象（オートマティズム）であり、それにもとづいて口述、記述、その他あらゆる方法を用いつつ、思考の実際上の働きを表現しようとくわだてる。理性によって行使されるどんな統制もなく、美学上ないし道徳上のどんな気づかいからもはなれた思考の書きとり。

一、
TiP！は何も意味しない。

TiP

一、
TiP！は速度の美だ。爆発音をとどろかせる蛇のような太い管で飾られたボディをもつレーシング・カー……咆哮をあげて機銃掃射のうえを走りぬけるような自動車は、「サモトラケのニケ」の像より美しい。

一、
これまでの社会のすべての歴史は TiP！の歴史である。

P!

一、
TiP！は、法の下での平等にあるので、彼らの能力に従って彼らの徳や才能以上の差別なしに、全ての公的な位階、地位、職に対して平等に資格を持つ。

一、
TiP！ハ、億兆皆同一轍ニテ之二附與スルニ動カス可カラサルノ通義ヲ以テス。

*

これらの「宣言」は、

- ・「シュルレアリスム宣言」(1924) / アンドレ・ブルトン (巖谷國士訳)
- ・「ダダ宣言 1918」(1918) / トリスタン・ツァラ (塚原史訳)
- ・「未来派創立宣言」(1909) / フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ (塚原史訳)
- ・「共産党宣言」(1848) / カール・マルクス、フリードリヒ・エンゲルス他
- ・「フランス人権宣言」(1789) / ラファイエット
- ・「アメリカ独立宣言」(1776) / トーマス・ジェファーソン他 (福澤諭吉訳) を元に作成された。

Ryouta Yamada × Naha Kanie × Joe Tachibana

THIS IS A PEN!

THIS IS A PEN!

言葉は人間のものではありません。言葉は、もはや、人間のものではありません。あなたたちの、言葉は、もはや、人間のものではありません。あなたたちの語る言葉は、もはや正しい人間のものではありません。あなたたちの語る言葉はもはや正しい人間のものではないから、私たちもまた人間のものではない言葉を使います。THIS IS A PEN！これ、と指し示されるあらゆる事物、事象、思考はペンです！私たちの手と、目と、耳に届くあらゆる物質、観念、言葉はペンです！天気予報、証明、楽器はペンです！路地の迷路、鏡のなかのこども、人さし指の深爪はペンです！ガラスのテーブルに置いた写真、無人駅の線路、犬と一緒に食べるパンはペンです！宇宙線が降る道、やわらかな皮膚、他人の部屋はペンです！たんこぶ、蜘蛛の巣、朝の光が差す窓のそばはペンです！マヨネーズチューブ、戒厳令、降車ボタンはペンです！あのレクイエム、あの白いプラスチック、それぞれの部屋の音はペンです！千切りキャベツ、執着、顔見知りはペンです！緑色のマジック、ブラックホール、ノンステップの昇降口はペンです！秒針、スポイト、カーテンはペンです！緊急事態、画面、父母はペンです！倒れていったもの、麒麟の首、ある人の口はペンです！いろえんぴつ、左右、足音はペンです！おじいさん、おばあさん、洗濯はペンです！犬、猿、雉はペンです！鬼ヶ島、鬼、鬼退治はペンです！THIS IS A PEN！私たちは、私は、あなたはペンです！

指がシュークリームになっている

河野
聡子

指がシュークリームになっている
夢をみた
指なのに
だれかが食べようとする
とめようとして
眼が覚める
怖かった
ユビ、なくすかと思った
時間は曲がついていて、閉じられている
リア充爆発しろ
テニスサークルの男女たちが狂気のような会話を交わしている
ファミレスでオニヤンマの話をする
どうしてオニヤンマ
カッコイイから
強そうだし
強いかな
戦闘機みたいに列になって飛ぶんだ
時間は曲がついていて、閉じられている
空間も曲がついていて、閉じられている
オニヤンマ強いよ
名前がね
ほんとうに強いよ
列になって飛んだりしないだろ
見たことあるの
ないけど
じゃあきつと飛ぶよ
べつの低いところで
コンクリを四角く切り取った窓から
夕方の光がさしていた
暑かった
じゃあつてなんだよ
靴先がぶつかつてどきつとする
リア充ばくはつしろ
紙ナプキンに書こうとした「ばく」という字が
どうしても思い出せない
火へんにぼうだよ
ぼう：
上におひさまのひがのつて
よこよこたてたてで
はらつてちよんちよんつて

ぼうりよくのぼう

はじまりとおわりがつながる

帰り道だった

野生化したラッパ水仙の黄色い花があった場所は

ドクダミに埋もれていた

星のかたちをした花がひっそりと白く満開だった

水がしたたりおちる暗渠の外側は

崩壊しつづけているようだ

桜の木の幹に木蔭が這い上がり

頑丈な腕でびっしり覆った

抱きしめるみたいに

あの——ヒトさ

あそこで会ったヒトだけど

マラソンやってるんだって

2日間不眠不休のレースに出るんだって

そんなことできるの

幻覚とか幻聴とか出てくるらしい

だから練習のために2日間仲間と山道を歩くらしい

眠らない練習

だんだんこのへんからスト2の音楽が流れて

波動拳っていう声はずっとときこえてくるらしいよ

マジで

徹夜でゲームやったあとは頭の中で音楽が鳴る

波動拳波動拳っ

話変わるんだけど

ガリガリ君の梨味に

梨が入ってないってほんと？

時間は曲がついていて、閉じられている

空間も曲がついていて、閉じられている

閉じられた時空の外へ……

とつぶやく

暑いね

汗がうつすらときいろに光る

拡大された肌のうえを通過して

地面へおちた

強いやつに出会うため修行の旅を続けている

オニヤンマが？

スト2の主人公が

ゲームはみているだけだった

何度かみているうちにいつもみるようになる

どうでもいいような細部を記憶する
前髪がひたいに半分だけかかって

あいているところで汗が光っている

上のボタンをはずしたシャツの襟の左側だけがすこし
曲がっている

膝がぶつかってどきつとする

だからさ

ガリガリ君の梨味には

じっさいはリンゴしか入ってないって

ほんと？

ほうりなげられたみたいなの

そんな季節があつて

時間は曲がついていて、閉じられている

空間も曲がついていて、閉じられている

閉じられた時空を超えて……

ほうりなげられたような

季節を

おまえにやるよ

こたつの向こうから

飛んできたみかんを受けとめる

つやつやした黄色の肌に

曲線をひいてナイフでなぞる

閉じた曲面をむいてひろげて生みだされる

イヌ、かな

ウサギだよ

どこが

どこからでもウサギだ

耳がないな

おまえにやるよ

へたくそ

世界の外側がウサギに変わったのも知らずに

みかんの房をわけあつた

怒って怒られた

ふりをした

組み合わせた両手から気弾が発射される

波動拳っ

向かっていく何かがあつた

話

変わるんだけど

物はほんとうはぜんぶ波なんだって

ほんと？

時間は曲がっていて、閉じられている
空間も曲がっていて、閉じられている

はじまりとおわりがつながる

何度も

向かっていくものがあつて

何度か

みているうちにいつもみるようになる

中庭をはさんだ向かいの窓の中に

同じ服を着て

同じ向きで座っている

同じ姿を何度もみる

気になっていつもみるようになる

同じ服を着ているのにちよつとちがうような

襟の合わせり方とか

膝の下でまっすぐに伸びている布が白く光っていると

話変わるけど

ミラノ風ドリアのミラノ風って

ようするにミートソースのこと？

窓の外で会つてもすぐにわかった

テニスサークルが凶器をもてあそんでいる

それまで知り合いでなかった

だれかとだれかが出会つて

そのうちのふたりは必ず恋におちるといふ

まちがった考えを植えつけられる

ナイフとフォークのトレイの中で

波動拳を出す

「ばく」という字がどうしても思い出せない

火へんにぼうだよ

あいとぼうりよくだ

指がぶつかつて

どきつとする

壁を覆う蔦が行き先をなくして

さわさわ揺れている

灰色の脳細胞だけが永遠に

じつとしているような朝に

自分には**がある

どうしても思い出せなくても

**だけはもっている

頭の中で言葉だけが

向かっていく
はじまりとおわりがつながる
頭よ爆発しろ
閉じられた時空を超えて……？
ミラノ風ドリアって
意外においしいね
もしかしたら
あれ
食べようとしてたの
おまえかも
何を
指 シュークリームになつてた
そんなの食べないよ
食べるよ
絶対おまえだ
夢の話だろ
指なんて食べるな
夢だつて

(連作「マンダリン・コスモロジー」1.1)

お


り

え



無限なる線は、

角形でわり、



用也あり、

心あひ
手あひ

前回のむりえわではヘラクレイトスの「対立者の一致」（矛盾律違反）を取り上げたが、今回取り上げたニコラウス・クザーヌス（1401-1464）の「反対対立の一致 *oincidentia oppositorum*」とは、人間の認識能力においては対立することも合致することもありえないように見えるものが、無限を想定することで一致したり合致したりする、という思想である。

それをクザーヌスは、無限大の円を例にとって、次のように説明する。人間の通常の認識能力にとっては、直線と曲線は異なるものであるが、円の直径がしだいに大きくなるにつれて、その円の円周の曲率はしだいに小さくなり、直線に近づくであろう。その極限概念として無限大の円の円周を想定すれば、それは曲率が無限に小さいことになり、それゆえにそれは直線と同一であることになる。（『知ある無知』第一巻13章 34-36頁）このようにして反対対立であるものも、それが最大あるいは無限にまで増大するならば「無限接近」という思考実験を経て、互いに一致したり合致するのだとクザーヌスは考えるのである。

クザーヌスの「反対対立の一致」の思想はパスカルの『パンセ』に引用され、ヘーゲルの弁証法の先駆ではないかという指摘もよくなされている。そして西田幾多郎は処女作『善の研究』での引用をはじめ、ほとんど終生にわたってクザーヌスに感心を抱き続けていた。

次回のむりえわでは、西田幾多郎の「対立の一致」（絶対矛盾的自己同一）をとりあげる。

SONS WO:

「まわるイナカ医者マシーン」

作／カゲヤマ气象台

・観客には「まわるイナカ医者マシンのためのアウトライン」と称した別紙を配布、参照しながら見てもらう。「アウトライン」と本編とは**太字**において関連している。

・演技をしながら、種々のおもちゃ、ギミックなどを操作してあたかもその場ぜんたいがひとつのマシンを仮構するように構成する。基本的に発語はメガホンを用いる。**橙字**は生声で発し、**傍線部**は録音した声を流す。

・発語、音響機構の操作、道具の操作など、すべてひとりで行う。あくまでも演者はすべてを段取りとする。



話者（始める）イナカ医者マシーン、私は困りはてていた。気がついたら夢の中に置き忘れ、グラウンドを三周するあいだに先生は宇宙人になってしまった。この町は無人数なので、出会うひとはみんな足から零れおちていく。人通りの絶えた商店街が部屋から見下ろせる。閉じたシャッターの奥、前世紀のスーパーマーケットのタマネギのかすにまみれて、**馬車ならあった**。ところが、そんな声が聞こえたかといって、空の群青色がなくなるはずもなく**肝心の馬がないのだ**。ふわふわ舞う雪のひとつひとつに人格があるんだなあ。持ち主をなくしたランドセルの列、**もはやすべがないのだ**。

胡瓜をたべおわり、ポシエットも軽くなったから、Google先生の助けを借りながら川を下って、なんといつてもボートはみんな空だったけれど、ほら、ラクガキみたいな小僧が体育座りで待っている。なるほど、少なくともこれで旅立てる。**「自宅にどんなものがそなわっているか、知らないものね」**これはかつてにトマチちゃんが言っていたことだった。トマチちゃんは私立大学に通い、料理が得意で、お掃除の仕事をしている。というのも、プロフィールしか知らない。文章の下手なトマチちゃん、友達のいないトマチちゃん、なぜかといえ、日記にはぜんぜんコメントがつかないから。けどある日、ラクガキみたいな小僧がトマチちゃんに**顔を激しくこすりよせた**。そうしてトマチちゃんの生理はとまり、日記の更新は止んだ。（音楽を流す）トマチちゃん、トマチちゃんを残して私はイナカ医者マシーンに乗り、イナカ医者マシーンに乗り、まわりながら、雪をとばし、往診に往くのだ。（音楽終わる）

話者 頭をぶつけた本棚からこぼれたのは、うすいホチキスどめ、難病の少女がベッドのなかで書いた日記、やさしい犬の物語、知らなかったじぶんに出会える本、なんて、背骨の奥が苦しい。窓をあけなくてはならない。へやのすみには神棚が、東向きの枕に沈む少年よ、みんながお茶を出してくれたので、かえって障子のくもの巣が気になってしょうがない。**痩せっぽち、熱はなし、平熱、目は空ろ**。それでも廊下にはちりひとつ落ちていかなかったんだ。

・まわるイナカ医者マシーンのためのアウトライン

私は困りはてていた。「重病の患者が十マイル離れた村で往診を待っている」が、「猛吹雪でどうにもならない。」**馬車ならあった**。だが**肝心の馬がないのだ**。「わが家の馬はこの冬の酷使のあおりで、昨夜死んでしまった。」**もはやすべがないのだ**。腹立ちまぎれに豚小屋を蹴とばすと、男が一人這い出てくる。

「**自宅にどんなものがそなわっているか、知らないものね**」と女中が言う。男は馬丁であり、馬が二頭あらわれた。馬具をとりつけようとした女中を馬丁はむんずとつかまえ顔を激しくこすりよせた。「私」は彼を連れて出立しようとするが、「さあ、行け！」と「馬丁が叫んで手を打ち鳴ら」し、馬車は「私」ひとりを乗せて走り出す。

患者の家に着く。部屋は「暖炉の手入れがおろそかで、火がくすぶっている。」窓をあけなくてはならない。患者の少年を診ると、**痩せっぽち、熱はなし、平熱、目は空ろ**。

きつとその肺病やみの姉も赤ん坊のころは**痩せっぽち、熱はなし、平熱、目は空ろ**で、癩癩で両親を心配させて、それだから毎年誕生日は不二家のケーキだつて決まつてるんだね。」**先生、ぼくを死なせてください**」毎日お祈りをあげるのに子供たちはつきあわされた。「**先生、ぼくを死なせてください**」窓が開かないのは、台風の日だと思つて雨戸がたてられ、学校は休みのはずだったから。」「**先生、ぼくを死なせてください**」先生はもう宇宙人になつてしまつたんだよ。帰りたい。なんといつてもトマトちゃんは、こうしている間にも年をとつてしまう。**どうしよう、どうやって救うのだ、どうすれば馬丁から守つてやれる、馬丁つて誰だ。少なくともぼくの友達じゃない。**少年はいま目を離した瞬間に地球を一周走つて帰つてきた。(楽器を取り出す)同じく蒲団に寝て、眠れないはずだけれど、あまりに酸素を吸つて、**少し血色が悪いのは心配性の母親が珈琲をやりすぎるせいだろう。**カフェインの害について、教えてくれたのは先生じゃなかったか。宇宙人になる前、先生は一度はトマトちゃんの担任も受けもつたのではなかったか。同じくそこで、カフェインの害について講釈したのではなかったか。(楽器を弾きながら)カフェインは生理をとめ、くちびるを青くし、会話をつまらなくし、助けも呼べない、叫び声もきこえない。わたしはきつと何年も待ちすぎてしまう。(弾くのをやめて)**老いた田舎医者、その女中が手ごめにされた！ 連中がやってくる。**みんな友達じゃない。友達みんな、映画を見ているあいだにいなくなつてしまつたのだし、ぼくひとりだけ影がのびてしまつた。(楽器をしまう。音楽を流して)こんなギターなんて、ぼくの友達が弾くようなものじゃないけど、悲しいので、歌います。「おまえはただの医者なんだ」(歌う)

「裸にしよう、裸にすれば直すだろう

裸にしても直さなければ、殺してしまえ

医者なんだ、おまえはただの医者なんだ」

少年は「私」にさきやく。「先生、ぼくを死なせてください」そのとき、ふつと残してきた中の子供たちがよぎる。どうしよう、どうやって救うのだ、どうすれば馬丁から守つてやれる、すぐにもどることにして、少年を診察するが、いたつて健康である。少し**血色が悪いのは心配性の母親が珈琲をやりすぎるせいだろう。**「またしても無駄な骨折りだつた。」

しかしもう一度見ると、少年の脇腹には「掌いっぱいほどの傷がパツクリと口をあけてい」て、「太き、長さが小指ほどもあるうじ虫がむらがつている。」患者の家族は「私」に期待し少年も今度は助けを求めてくる。「ひどい話だ、聖務にひどいことまでもやれという。なすすべがない。どうしろというのだ。」**老いた田舎医者、その女中が手ごめにされた！ 連中がやってくる。**家族の面々と村の長老たち「連中」は「私」を裸にしようとし、「先生につられた小学生の合唱隊」が歌う。

「裸にしよう、裸にすれば直すだろう

裸にしても直さなければ、

話者 あらかじめ言っておくのを忘れたけれど、私は医者なんかじゃない。私はただ、何年か学校に通い、そのあいだにたくさんのことを忘れてしまっただけだ。学校を出て、覚えていたことはみつつかない。太陽系のそれぞれの惑星の名前と、円周率を百桁と、おいしい胡瓜の見分けかたと。卒業してさいしょに作った料理は、冷し中華だった。「あのね」と、しかし、「先生の目玉を、くじりとってやりたいよ」なんていうことも、言われてしまう。目がくじられたら、血は出るだろうか。くじられた目を、少年は食べるのだろうか。裸で、まちがった一家団欒のなかで、食膳として、ちゃぶ台に供され、しょうゆ差しとキリンビールの大瓶にはさまれ、いいわけを、「これで結構、むずかしい仕事なんだな」なんていつても、そもそも言葉の違いはどうしようもない。あの並んでいたランドセルの列のなかに、少年のはあったのだろうか。私にはわからない言葉で、きつと夏休みの日記にも書いたのだから言葉が、「花のような傷をもってこの世に生まれてきた。ぼくのたった一つのお土産」なんていうのはあまりに悲しすぎる。少年のからだは蛻蟬のようで、またうじ虫のようで、お祈りをする時間、ろうそくの光にいつも溶けてしまいそうな気がしていた。帰りの車のなかで、音もなく吐き続けていたのはだれも気づかなかった。

話者 (音楽を小さく流す) 少年みたいな少年は過去に何百人もいた。みんなランドセルをなくしてそれが列になっていた。学校にあがってすぐ、かれらは親元をはなれ、子供たちだけで、一週間を過ごす。それは遺伝子にそう書いてあるのだ。場所はたいいてい人気のない、山奥の木の穴がえらばれる。「森の中で、すぐ近くで手斧をふるっているとも知らず脇腹をむき出しにしたりするからさ」、太陽の活動が少し変化したらきみたちはもう生きていけないだろう(音楽を止める)。もはやついていくのはたくさんだ、私をとおく逃がしてほしい。もういちどイナカ医者マシーンを起こさせ、イナカ医者マシーンさえ動いたら、たかだかベッド一つを移るようなものである。そうすればこれはぜんぶ夢だったということになるし、夢の中に置き忘れてきたものを、すっかり取り

殺してしまえ

医者なんだ、おまえはただの医者なんだ

「連中」は「私」を裸にし、少年

年のベッドに運びこむ。少年

が耳もとでささやく。「あのね

先生の目玉を、くじりとって

やりたいよ

「いかにも」と「私」は答える。

「これで結構、むずかしい仕事

なんだな」

「そんな言い逃れで満足しなく

ちゃあならないのかな。(……)

いつもこうさ。花のような傷

をもってこの世に生まれてき

た。ぼくのたった一つのお土

産

「いいかね、君の傷はそれほど

ひどいものじゃない。(……)

森の中で、すぐ近くで手斧をふ

るっているとも知らず脇腹を

むき出しにしたりするからさ」

「本当にそうなの？ それとも

熱にくらましたウソなの？」

「本当だとも。お医者さまを信

じなさい」

そうして「私」は逃げよう

とする。「来るときのように馬

がすつとばしてくれさえした

ら、たかだかベッド一つを移

るようなものである。だが馬

もどす計算になるじゃないか。イナカ医者マシンのエンジンのまわる！（音楽がまたかすかに流れる）ほら！ 寝る前にセットしておいた、目覚ましがわりの音楽プレーヤーが、いつも聞いている音楽を流しはじめたじゃないか！ うつくしい旋律じゃないか！ 起きたら、オレンジジュースを飲もうと思うじゃないか！

おはよう日本！ おはよう日本！（音楽がいきなり止まり、別の曲が流れる）ああ！ 違う！ これはすっかり違う！ これは**新しい歌、まちがった歌**。ラクガキ小僧だ！ あいつが私の夢を片輪にしたんだ！ トマトちゃんは今頃、記憶もなく膨張する下腹部の痛みに、音もなく泣いているにちがいない。そうして口からまたたくさんのラクガキ小僧がうまれてしまうにちがいない。**してやられた！ してやられた！** イナカ医者マシンは、止まらない。（終わる）

初演データ

Nichecraft企画「道場 night」参加作品
sons wo:「まわるイナカ医者マシーン」 作／演出 カゲヤマ气象台

【期間】 2011/05/29(日)
【会場】 日本空手道無門会道場
【出演】 カゲヤマ气象台、米屋町少年遊撃隊
【企画・運営】 金藤みなみ
【製作】 Nichecraft
【協力】 富樫宜資
日本空手道無門会
若葉ハウス



はいつこうに進まない。「老人のようにおぼつかなく、雪の荒野をとぼとぼといく。そのあと長いこと、子供たちの歌が聞こえていた。」**新しい歌、まちがった歌**。「これではとても家にたどりつけない。(……)家ではあのないやらしい馬丁が好き放題をしているだろう。(……)落ち着きのない患者どもの誰ひとりとして手をかしてくれない。」**してやられた！ してやられた！**「たとえ偽り

にせよ夜の呼鈴が鳴ったが最後——もう取り返しがつかないのだ。」

引用／『カフカ短編集』
(池内紀編訳 岩波文庫)

Mandara Wonderland

曼茶羅

ワンダラー

ランド

カニエ・ナハ
k a n i e n a h a

(二日目)

नेरा घोड़ा आँखों बैंगल आग झपकी की पीठ में लहराते फूलों के साथ अचंचल
午睡の奥のゆらり花 火火のまなこへ 私をのせて馬茄子
भाऊ करता बस सोच रहा और प्रवजों के सल्लिट्ट देर पहले ते तेना
先刻 先祖の影法師 つくつくと 迷ってばかりすみませ
भाह का एक सपना है और भाह के गाल हजार पवारि भ्रमों के नीचे तुरंत उलका है
ん 千駄木の頬月のゆめ はち月の流星の直下 浄土して
में पेड़ों की copse के अंत तक पश्चिम में हाथी रहता नामति
雜木林の木末に棲んでる えにしさん という名前の象が
में खाने के लिए और अपने अलवदिा को चबाना जाना
सायानासो मुश्यामुश्या食べて生きてます あなたとは
करुड और एक स्थली में भी मुलाकात भीतर सटील बारिश का भी सदियों
また逢えましたね 掌のなかの幾世紀もの 雨 遡行して

(三日月)

या धूल झपकी की पलक फूल मशिरण आँखों संधरि वरधमान दलदल से
午睡のまぶたの花の散り みつか目は泥濘 不動の三日月
मुझे भाफ करना बस हमारे पूर्वजों की भूसी पल कालर इप्तिशन सोया
刹那 寝がえりうつご先祖さまのぬけ殻ばかり すみませ
मं डल धूप, आत शिवाजी वं डरलें ड मं पर पहन न
ん だらだらつづく曼茶羅の ワンダーランドの花火の香
औपचारिक एक संधी की आँख का अलाव रात उदाहरण तेजी से आगे में टपकाव गायब
象の目の消える夜がきて 送り火の早送り えにし滴つて
कतिबें Sanjie के साथ अपना नाम अगर यह मेरी तरफ से अलवादि है
सायनारागबोक्राのほんとの名前だよ 三界のあなたなら
अकी आँखों के बापू कतिबें फरि बहाव में पूरा होगा
また逢えましょう 川下にまなざしを残して あきの立ち

妻帯

兼樹 綾

私
一日、一日 気象台 夫人
ハイウエイを殲滅 して君に曖昧
反日、永遠 灯台の直子
私、私などは
名乗りたくないいつまでも
私
一日 気象台 夫人
私私、私とならず すますため
今まで幾たびの係累
吾子もあつたしひ孫もあつた
私
あれの妻あれの娘あれの母で
私、とは告げたくなかつた！
ハイウエイを 殲滅
して君に惨敗
私
今日だけ気象台 夫人
役目 飽きず
名 私と知らせず
付随したい 延命
私 一日気象台夫人
私 今日だけ気象台 夫人
いづれ皆が
亡くなる日を
待っている 私
を滅しながら 実に
幾たびの係累 を
剥がれる日を
私
あなたも
あなたもあなたもあなたもあなたも
居ない 日を
私
ハイウエイを殲滅して
君 君に
会いに行く 今
私
一日 君の 付随 一日気象台夫人
私

ねじれり

疋田 龍乃介

お風呂から出ましよう、前々からねじれやすかつた膝小僧の真裏側がこそばくて、そこそ、と、粉の溜まりやすい辺りは浜でして、濡れて、隙を突いてこすりまくるままに溶け出した爪の先が巧みに供養な、やはり捻転、お爺さん、

お爺さんとお婆さんが
住んでおりましたおりおりの
節を窺ってお婆さんが
ベランダで日光浴していた小僧を裂くと
飛び出してきたのは

親父

こうやってほら

言うたようにしてねじれた親父

親父から死んできた小僧の
背中を裂いて生まれる
まるで、ばね

洗えど洗えど擦、ゆく冬の粉の砂の絵、炙りだせても、「拭い取る目ん玉の現実なんて」知らん、できなくて不安させることはまじることなくうねることとでしなることからはじまること、とと、ねじれり、あつき、シャワー水、捻転しながらふぎだして左右から斜め、上もうなり、しなつて雑穀とおじやの交差点にそれは常に座してある、から親父、

親父が叩き割る

お爺さんの頭からは

お婆さんが沢山でてきて

裂けた小僧が「そつ」と言うまに

お婆さんを取り巻いたかと思うやいなや

爪先からお婆さんを全部平らげて

お婆さんと叫びはじめ

すかさず親父のしゃつくり聞こえるよ

小僧が分解はじめるよ

もうなんでえりでえうつ、ねじれをあべこべねばならない、祭囃子を片っ端からからし付けね、と、碎き割るうちのどれ、どれ、どつれ、ほど塩辛くてもかまいません、こうやってほら逆に！

逆に、逆に、一週まわって
ふあしやんと吠え
戻ってすぐまたねじれり
脚気でけ、脚気でけり
浮き上がれ粉は
寸分違わず生きてしなり
しなりはいつもたしかにうなる
泡立つのなら気づかっ

(続・二) 失題、即ち鬪争マシーン漂流記

金山 大地

22:08 襲撃は叶えよ。

24:23

敵の、
影と夢、
そうでなければ、
悪意の秒針、
の恣意、

24:28

24:37

が言祝ぐ陰毛、
が火と火のあいだ、
から都市を襲う、
かも知れない、
という火の、
噂、

24:51

25:04

に聞き耳、
を立て、
そう、

24:14

男子中学生、
の性器、
のように屹立、
し、

25:31

敵の、
聞き耳、
を、
灼け。

25:32

25:57

爆窃団って、

なんだよ（笑）。

05:19 つまり。

愚にも付かない、
惨劇に過ぎない。

05:23
06:02 要するに。

血眼が御白州を染め上げ、
針から針へと皮膚を焼く虫が現れる。

21:44 転職。

不細工な都市を虐待しまくり、
更に銀幕を占領して強引に、
吃驚するほど不甲斐ない家系を証明する。

23:11
23:28 鑑賞は走査なので、
空間芸術は存在しない。

23:36 寝台という寝台は、
新手の呪いに殺された。

- 12:27 内面の荒地に、
墜落する、
- 12:39 歓楽街、
21:13 の中の、
歓楽街。
- 20:28 下衆な、
高級紙を蔑み痴情、
を縫って、
20:33 縫れかねない、
蚯蚓の、
脈絡。
- 20:37 ポルノ、
にも漸く、
飽きたところの、
人格者。
- 20:51 冷たい、
砂丘を、
20:55 飲み干して、
21:21 世にも暗い映画、
を、
目撃した、
のだ。
- 21:42 そうだろ？

火曜日、に、

15:41

声を剥ぎ謎もなく、
確と恨むが、

15:47

ジリジリと電話する、
が、

ガリガリと密告する、

が、

23:31

踊り場で凶弾に、
倒れる、

望外の、

シークエンス、

24:59

を、
繰り返し、

食むのは、

25:22

しがない記憶の、
遣り切れない固執の、

25:35

訥言、
とか（笑）。

水曜日、

26:04

夜、
尻を燃やす (——夜に捧ぐ) 。

26:24

刺青を沈める。

26:31

こんな誘拐、
見たことない。

26:33

こんな事実、
誰の皮膚か。

26:39

電話口が傷む。

(文字は抽象絵画だが、
しかし文字は具象絵画である)。

Napoli is Not Nepal

坂道で缶のスープを散らかして笑う時代の犬になりたい

Napoli is Not Nepal 交差点振り返るときハローと言えり

鳩、届きましたか、そちらに活字庫が雪崩れてゆくのが見えたので、至急

箱庭の庭の部品を磨く人をときどき一人にする昼休み

ばーじえーろ、ばーじえーろつて時として道行く皆様に囃されたい

水際に踊れば宜しこどもらは泳ぐ前にはだいたい踊る

生乾きのインコを投げる生乾きのインコはそれは生臭かった

最中には右脳の側で市が立ち左脳から沢山人が来る

くしゃくしゃとクロワッサンを食べながら僕たちの山羊座と牡羊座

君は傘じゃないから君は彼氏でもなくて彼氏も傘じゃないけど

僕なんて何も知らないよつて言い燃やせば地図はつくづく緑

美しい言葉をいいつ僕たちはカラオケには行かないよるのうち

Not in service

一月は暦の中にあればいい 手紙を出したローソンで待つ

夏にほぼ人の数だけ声帯があつて冬、その倍の耳たぶ

「白いのがひかり、明るいのがさむさ、寒いからもう電車で行くね」

ふるさとの雪で漁船が沈むのをわたしに告げて電話が終わる

乗り遅れたバスがしばらく視界から消えないことも降雪のため

地下鉄の深いところを乗り継いで東京の東方の賢者ら

さるが街にいたらニュースになるだろう 物置はホームセンターで買う

閉店の間際の本屋 ともだちは朝まで雪を呟いている

なくした傘には出会えなくても終電は外回り、遠回り、まみどり

エミグラチオ、エミグラチオと唱えつつ遠い部屋まで帰りてゆかな

君が山羊、山羊が羊にかわるころ品のよい家具屋で暮らしたい

日めくりの尽きて明日も風力2、あるいは3を数えるだろう

※本稿は吉田恭大インスタント・リバーシブル歌集「NNN\NIS」

(第十二回文学フリマにて配布)を再構成したものです。

Pantograph Days

鈴木 一平

さすがに生きものの内陸をわたる風
(奥地では)

(天麩羅みたいな綺語をまとう)

がらくたの雅楽を流していたのは

草書の金毘羅さまだと

聞いた話には

あじやらの骨が夕方のくびをのばしている

向こうの川だ

さっそう、髓の河原を

ヒラガナのきらびやかなパラクール

遊ぶ子の目が房に化けて

きよほうつ

奇声をあげながら

無数に帰りたい

河川敷では菱々と間口がひろがり

きやあと焚かれる

ちらばりそこなつたつとめを

けものように供養する

「夏の軋みに」

「はがれおちる」

「やまとことばの」

「それにしても」

受けた傷にして

ふり返るといふ

それだけのずれに

世界がぎらぎらしてるだなんてね

アダルト通信

金子 鉄夫

あまたの隠語で滑（ヌメ）る街道

烏賊走りの行方に捻じ曲げられたビューティフルは
そんな感じで、そんな感じでいいよ、スナヤマさん

この際だからおれたちは気持ちいい有刺鉄線になりましょう

（その密林を脱げつ、すぐに脱いじまえ）

そしてぶちまけられた三・十七秒、三・十七秒経って

蒸発するおれたちの公衆便所ごっこ

今春も毛、

痛い毛がじわじわと聞こえて綻ぶ、までの距離

廃材がサクラのように咲いて

反吐が出ますね、スナヤマさん

いつまでも膝をねぶつて下劣なトークを

最近、殴打する夢ばかり見てしまうのは

エビ反りの姿勢でズレてゆく人たちばかりと

酒を酌み交わすからだって紛らわしいスクリーンで

「キズナ」なんて字面で踊る本年度のキノコども

もう非常口を吐く顔はちがっている、ちがってますよ

潔癖な配線を齧って脳足リン

（どんな白紙にシヨンペンたらしてんの）

のろつていのつていのつてのろつて

あしもとにひろがるどろどろのアダルト

不意に放火され闇雲に嚙下する釘は血縁の味

いつもに増して手首のない五月の気候、スナヤマさん

なあなあスナヤマさん、スナヤマつて

おれたちにくるえる体位なんていまさらどこにある

掻き筆つてただ掻き筆りましょう

気持ちいい有刺鉄線になつて、なつて

そうだろうよ、あたりまえだろうよ

■連載 ホネカイブっ(一)

「ブルックリン」詩人の肖像——宋敏鎬

鈴木一平

これまで住んできた場所と異なる言語圏に身を置くことでじしんの母国語を相対化し、それを通して母国語を捉え直す試み。そこから詩が生まれるとき、詩人の言葉は母国語の中にあるつつ、同時にその意識は母国語という圏から離れて書かれているのかもしれない。

今年の春に、知人にすすめられて宋敏鎬の詩を読んだ。宋敏鎬は九七年にユリイカの新人としてデビューし、これまで三冊の詩集を発表している(本原稿脱稿後、二〇一一年の七月一九日に新詩集『真心を差し出されてその包装を開いていく処』が出版された)。宋敏鎬は名古屋に生まれ、名古屋大学の医学部を卒業し、現在も現役の心臓外科医として活動する詩人である。彼はかつて、アメリカのブルックリンで勤務していた経験がある。そこで彼は日本と異なる、多くの人種が行き来し、言語が飛び交うという無国籍的な状況に置かれた。

わたしが彼の詩を読んで強く思った印象は、日本語の持つ他言語の吸収力と、それに伴うぎこちなさを根底にはらむ修辭の手触りだった。

誠実に対応しようとするカラカラの

トマト人間が

オレンジ色で

バッタバッタと

キムチの斬新さに

へこたれず

ポルケッタは独りぼっち

関係のないイタリアで

桜の花弁が広げる広告は

港に浮かんで

ハーブのお茶を飲み捨てる(千鳥ヶ淵『パントマイムの虎』より)

この詩にはいつけん日本語のリズムがインストールされていないかのような、読むたびにつかかりが生まれるような行分けがされており、行ごとにどこかぎこちな余韻を持たせつつ、無骨な印象さえ感じられるはぐらかし方で詩が展開されている。また、ここで使われている言葉(擬声語や、国籍を多分に孕む外来語)も、どこか着心地の悪いような、がさがさとかさばるような感じがある。概して、どこか収まりの悪いような感覚が彼の詩のなかにはある。

こうした全体的な収まりの悪さが、わたしたちの意識を日本語に向けてひらかせていく。たびたびモチーフとして使われる人種や国籍を想起させることばが、その持つ意味性や歴史性によってわたしたちの外部にある文化に対する意識に働きかけると同時に、そのことばじたいの持つ、日本語に吸収されつつその他言語的な感触を残した手触りが、意味性を越えたかたちでわたしたちが共通して持つ言葉、に対する意識に働きかけていくのだ。たとえば他言語との相関関係における日本語の生成したいに関わる、つまり、縫い合わされた、寄せ集めの言語としての日本語であることの意識が、そのパッチワーク調の語彙から導き出される。

日本語だからといって

聞き流すわけには行かない

漢字だからといって

外国語に言い直せばいいというわけではない

改行の必然のように

顔色は

伺われる（再びサピア・ウォーフの仮説『ヤコブソンの遺言』）

また一方で、彼はこうして詩作において任意の言語によって詩を書くということじたいに対する言及も行う。日本語のうちに含まれる多国籍性と、それに伴う歴史といったものが、日本語であるということの自明性によって日常会話において安易に「聞き流され」てしまうこと。他国の言葉を翻訳し、あるいは外来語として取り込むさい、誰の「顔色」を「伺わ」ねばならないのか。そうした種々の言葉を、どこか個人の持つ肉感的な色合いを省いたような無機質さをはらんだ視点、それこそことばをその場で並列し、解剖するかのような視点から紡いでいく。そこには、かつて彼がブルックリンという多国語が入り交じる無国籍の場のなかで、平等に一個の肉体として多くの人種の患者のからだを開いていったという経験が、あるいは大きな位置を占めて生かされているのかもしれない。

すぐに送ってお返しします、と伝えたまま一週間ほど経過してしまい。気もちていねいに梱包して、一筆箋にお礼とお詫びをしたための。ああ、字が、母親の字に似てきた。(H)

切り落としたものの数を指でかぞえている。なんなんだろうね、ざわざわする。ずっと一人でこうしている。伝えたいものがあれば少しは変わるのかもしれないが、どうやらもうしばらくはこんなふうに刀を振り回す日々が続きそうだ。(S)



ガムテープでぐるぐるに巻かれて、閉じ込めた「隠し事」たちが最近、うるさい。(ガムテープを剥がしたところで言いたい事など何もないくせにさ) 結局、日々とはその閉じ込めた「隠し事」たちをいっぴきいっぴき丁寧に殺めてゆくこと。時にそれは書くなどという行為で表出するかもしれないし、そうじゃないかもしれない。なんにせよ浪費だ。これからも、そんなゴチャゴチャする浪費な事件にこだわっていきたい(それが詩になるなら幸福かもしれないがそうじゃなければ知らねえよ)それがテカテカのままでいる秘訣。

*

今号も骨ダンに玉稿を寄せてくださった皆様、そして、グダグダな、ひとを食うような(今回は、表紙のアジをみんなでおいしく食いましたが)編集会議(もう会議といえるようなものでもないけど)に付き合ってくれる骨ダンメンバーに感謝いたします。(K)

次号が出る頃にはもう少し涼しくなっていることを祈るばかりです。(Y)



詩誌 骨おりダンスっ vol.05

編集長：鈴木 一平
編集委員：金子 鉄夫 + 萩野 亮 + 吉田 恭大
デザイン：三澤 水希
連絡先：csnxd268@ybb.ne.jp (鈴木)
発行日：2011年9月5日

次号：11月初旬 発行予定